



絆深め 次代につなぐ

世代超え 思い一つに

ペルー・キムタカ

ペルー沖縄県人会の若者組織「キムタカ」。17～50歳の元県費留学生や元市町村研修生約100人が所属しています。留学を目指す若者への支援や、沖縄伝統文化の普及のため、沖縄祭りや県人会が開催するイベントのサポートを行っています。

キムタカは幅広い世代が楽しめるイベントを開催しています。2017年に開催した「オキナンピアダス」は出身市町村対抗のスポーツ&ゲーム大会。バレーボールやバブルサッカーだけでなく、サーターアンダギー食い競走など沖縄文化がテーマのオリジナル競技も。楽しみながら沖縄について学びました。

18年に企画した「帰る場所プロジェクト」では「あなたにとってウチナーンチュとは?」という質問への答えを紙に書いて船の形に折ってもらいました。幅広い世代からたくさんの船が集まりました。そのほかにも芸術祭や南米4カ国の若者がつなげるイベントも開催しました。

コロナ禍の現在、オンラインでの講演会やウチナーグチ講座を開催しています。会長の比嘉ソフィアさん(27)は「沖縄の歴史や風景を誇りに思い、世代を超えて伝えることが大切。ペルーからも世界中のウチナーンチュとともに、そのネットワーク強化に努めたい」と話しました。



2018年、沖縄県立芸大で美術を学びました。織物に力を入れ、大学のファッションショーで作品を披露しました。ウチナーンチュの温かさを肌で感じることができました。

比嘉ソフィアさん(27)
名護市・北中城村がルーツの3世



沖縄での経験を紹介した沖留会の発表会

沖留会では沖縄で学んだ伝統文化の継承と普及に力を入れています。特にエイサーと三線が盛んで、エイサーは琉球国祭り太鼓アルゼンチン支部、三線は「琉球サブカイ」というチームに参加して練習し、さまざまな催しで披露しています。また、

奥間オマルさん(38)
嘉手納町・重野湾村がルーツの2世

沖縄の魅力 発信に力

アルゼンチン・沖留会

県費留学や市町村師弟研修の経験者で組織するアルゼンチンの「沖留会」は、沖縄での経験を共有するため1982年に結成されました。会員は200人に達し、約50人が積極的に活動しています。沖縄の文化を日系社会やアルゼンチン人に発信するほか、県費留学生の選考や、新たな留学生への助言が活動の柱です。

沖留会では沖縄で学んだ伝統文化の継承と普及に力を入れています。特にエイサーと三線が盛んで、エイサーは琉球国祭り太鼓アルゼンチン支部、三線は「琉球サブカイ」というチームに参加して練習し、さまざまな催しで披露しています。また、

例年在アルゼンチン沖縄県人連合会で研修生発表会と世界のウチナーンチュの日のイベントの企画運営もしています。毎年、数千規模の観客が集まる沖縄祭りでは、沖縄の伝統工芸品や料理、観光名所などを紹介する展示を行いました。

沖留会の会員は、多くが留学でウチナーンチュとしてのアイデンティティーに自覚め、沖縄の文化や歴史を学び、伝えたいと考えています。会長の奥間オマルさん(38)は「沖縄には困難に耐える精神と豊かな文化があります。島の現在と過去を学び、ともに沖縄の文化を発信していきたいです」と力を込めました。



2019年に県費留学生として琉球大学で日本語や歴史を学び、JICA沖縄国際センターでインターンシップも経験しました。ウチナーンチュはどこにいても一つの家族。もっと沖縄の若者に海外のウチナーンチュに関わってほしいです。

上地メリサさん(24)
宮古島・本部町がルーツの3世

工夫重ね後輩を育成

ボリビア・レキオス

ボリビアの「レキオス」は県費留学生や市町村研修生のOB・OG、約50人が所属しています。沖縄アイデンティティーや文化の継承、ボリビアと沖縄の関係発展に貢献することを目的に活動しています。

特に県が実施する県系師弟受け入れ事業の広報に力を入れています。若者に沖縄やウチナーンチュネットワークについて興味を持ってもらい、留学や研修につなげようとSNSを使い情報発信しています。

2018年の世界のウチナーンチュの日は「島唄カラオケ大会」を開催。若者からお年寄りまでが「故郷」の歌を通して交流を深めました。

た。その他、沖縄そば作り体験や三線の稽古など、沖縄文化の普及にも努めています。

コロナ禍で集会などは控えていますが、オンラインイベントを積極的に行っています。昨年はボリビア4地域をつないで敬老会を開催。ウチナーンチュの日には世界7カ国100人がオンラインでつながり、琉球舞踊や三線を披露したり、ウチナーグチクイズを楽しんだりしました。

会長の上地メリサさん(24)は「沖縄の地が、私たち海外に住むウチナーンチュにとってどれだけ大切な場所か知り、誇りを持ってほしい」と呼び掛けました。

コロナ禍も活動着々

ブラジル・うりずん会

ブラジルの「うりずん会」は元県費留学生や研修生、ボランティア、沖縄ファン192人が所属しています。留学の経験を紹介し、沖縄の魅力を発信しています。また留学制度を周知する役割も担っています。

うりずん会はブラジル県人会の一員として、沖縄文化の普及や地域イベントに協力しています。「毎年多くのブラジル人も参加する「沖縄フェスティバル」では、空手や三線を披露したり、紅型やシーサー作りのワークショップを行ったりしました。また、新年会や六月会、忘年会、カラオケ大会などメンバーが交流する機会も多く設けています。

コロナ禍の現在、SNS上での活動に切り替え、Instagramやフェイスブックでさまざまなコンテンツを提供しています。他の州や国の人々も多く参加しています。2020年4月からはYouTubeで「ゆんたく会」を開催しています。専門家を招き、沖縄の精神性や伝統文化、工芸、沖縄戦、移民の歴史などをテーマにライブ配信をしています。

会長の高良シンティア小夜子さん(39)は「文化のない民族は歴史のない民族です。逆境を乗り越える強さを持った先祖に感謝し、沖縄の素晴らしい文化を守っていきましょう」と呼び掛けました。



那覇市の研修生として沖縄に行きました。会計、日本語、書道、エイサーなどを学びました。沖縄で独特の景観、陽気な人々、「生きがい」を感じることができました。沖縄の文化は私の日常生活にも存在しています。

高良シンティア・小夜子さん(39)
那覇市小樽がルーツの2世

協力：比嘉アンドレス(世界のウチナーンチュの日発案者)、紙面制作：熊谷樹、仲本文子